

2022年7月3日 礼拝説教要旨

詩編講解説教113「御手の届く範囲」

詩編113：1～9、ヘブライ4：14～16

ユダヤ教の伝統では113～118編を「ハレル」と呼び、祭の時に必ずこれらの詩編が歌われたと言われます。主イエスが十字架につけられる前の夜、最後の晩餐がありますが、その時は過越の祭でしたから、最後の晩餐の食事は過越の食事のことです。食事が終わってオリーブ山へと向かわれる時に「一同は賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた」（マタイ26：30）と福音書に記されています。この「賛美の歌」が、実はこの「ハレル」ではないかと考えられております。もしかすると今日の113編を主イエスが歌われて、それからオリーブ山へ向かわれたかもしれません。

4節に「主はすべての国を超えて高くいまし、主の栄光は天を超えて輝く」とあります。それは神さまがすべてを超越していること。神さまが比類なきお方であり、人間が到底及ばないお方であることが明らかにされます。これはすべての前提であり、わたしたちが基本的にわきまえておかなければならないことです。何より神さまは創造主であり、永遠なるお方です。この世界を造られ、人間をお造りになられました。それに対して、わたしたちは被造物であり、有限の、限定的な存在です。この隔たりは本来越えることができないのです。

ところがここに驚くべきことがあります。このようなすべてを超越され高くいらっしゃる神さまが「なお低く下って天と地を御覧になる」（6節）のです。これは「自らを低くして」ということです。神さま自らご自身を低くされて、この天と地をご覧になられる。この隔たりを超えるのはわたしたちではなく神さまです。一般的な宗教の感覚は、人間の方がそういう高みを目指していくのをイメージします。しかし聖書の神さまは神さまの方がご自身を低められることで、その隔たりを超えられるのです。加えて「ご覧になる」というのは、見るということですが、これは上から「見下ろす」ことではなく、見ることによって関わりを始めてくださることです。例えば、わたしたちが何かを見た時に、ただ眺めるだけでなく、そこから行動が促されるような見方があります。子どもが道路で遊んでいたら「危ない」と声をかけるように。

その行動が「弱い者を塵の中から起こし、乏しい者を芥の中から高く上げ」（7節）という行動に結びつきます。「弱い者」「乏しい者」が繰り返されますが、これは社会的に弱い立場の者のことです。もちろん孤児や寡婦（未亡人）、老人など弱い立場にある人々を考えてもいいですが、ここには「塵」（アファル）とあります。この「塵」で思い起こすのは、創世記の人間の創造で、人間は土の塵で造られたことです。はじめそこに命はなく神さまが命の息を吹き入れてくださって人間は生きる者となりました。塵は命が吹き込まれる前の状態です。罪を犯したアダムに向かって神さまは言われます。「塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3：19）と。それゆえに「塵」とは罪ゆえに死に定められた人間、命の息を失った人間と理解することができます。

そのように罪ゆえに塵に伏しているわたしたちを神さまはそこから救い出して「自由な人々の列に、民の自由な人々の列に返してくださる」（8節）のです。罪と死に支配されているわたしたちをそこから解放し、再び命の中へ連れ戻される。そういう神さまの救いをここに見ることができるでしょう。そのように113編は、天におられすべてを超越されている神さまが、この地上に目を注がれ、苦しみに喘ぐわたしたちに寄り添われ、死の淵から命の中へ引き上げ

てくださる、愛と憐れみに満ちたお方であることを示します。ここまで見てくると、この神さまの憐れみはイエス・キリストによって、わたしたちに完全にあらわれたことがよくわかつて思えます。

この救いについては新約聖書のいろいろな箇所から解き明かすことができますが、今日はヘブライ人への手紙を読みました。「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」(4:15~16) ここにも113編に示された救いの方向性が見えてきます。まことの神さまであられるイエス・キリストが、わたしたちと同じまことの人となられ、同様に試練に遭われた。それがキリストの受肉であり十字架の苦しみであります。わたしたちが負うべき罪の苦しみ、悩みのすべてを主はまことの人となられ担われました。そしてそこからわたしたちを解放するためによみがえられ、天に昇られました。それによって、このような塵に等しいわたしたちが大胆に恵みの座、神さまのおられる天の国に招き入れられるのです。ここに旧約から新約を貫いて聖書が示す救いの真髄があります。それゆえにわたしたちは「ハレルヤ」(1、9節)「主をほめたたえよ」と歌うのです。

このヘブライ人への手紙の研究の第一人者であられた川村輝典先生が先月天に召されました。世田谷の弦巻教会を牧会され、東京女子大学、東京神学大学でも教えられました。わたしたちの教会にも特伝できてくださいました。台風や地震の時は心配の電話をくださいました。先生のヘブライ人への手紙の説教集があるのですが、今日読んだところの説教の最後は次のように結ばれています。「このような素晴らしい恵みをわたしたちは与えられています。だからわたしたちは苦しいことがあっても、悲しいことがあっても、そこでつまずいてはならないのです。いつまでもそのことにくよくよしてはいけません。そこからもう一度、目を高くあげて主なる神の右にいますキリストをしっかりと仰いで、おそれることなくそこに向かって前進するのみ、これがわたしたちの信仰生活にほかなりません」どんなことがあっても、そこにも神さまの御手は届きます。キリストに現されたこの救いをしっかりと見て、それゆえに主をほめたたえながら前進する人生でありたいと願います。